

# 他者が「ふつう」であることの意味：対人認知および対人感情の観点から

## Person Perception in the “Futsu” Salient Situations

黒石 憲洋 KUROISHI, Norihiro

● 日本教育大学院大学  
Japan Professional School of Education

佐野 予理子 SANO, Yoriko

● 国際基督教大学大学院教育学研究科  
Graduate School of Education, International Christian University

 **Keywords** 「ふつう」, 対人認知, 規範・逸脱  
“Futsu”, personal perception, social norm/deviation

### ABSTRACT

日本人における「ふつう」概念の重要性について再検討するため、場面想定法を用いた実験的質問紙調査をおこなった。仮想場面として、他者との違いが量的に示される場面と質的に示される場面において、それぞれに拘束力の高い状況と低い状況を設定した。各場面において、周囲と同じ行動をとる他者あるいは周囲と異なる行動をとる他者を提示し、その他者に対する対人認知を測定した。結果として、いずれの場面においても、「ふつう」認知は周囲と同じ行動をとるかどうかにより影響を受けていた。また、他者との違いが量的に示される場面においては、遂行の高低に応じて対人認知が変化したが、それらの効果に「ふつう」認知による媒介はみられなかった。日本人における「ふつう」概念は、他者存在に向けられたものではなく、自己の状態として認知される場合にのみ、重要となる可能性が示唆された。

Two experimental questionnaire surveys examined the importance of the conception of “futsu” among Japanese. In both studies, respondents were presented two imaginary stories of a normative/deviant person. The stories differed in the degree of binding of the situations. Respondents rated the impression on the central figure from each story. In study 1, the difference between the central figure and others was suggested in a quantitative way. The person performing similar to others was recognized as “futsu”, whereas the figure superior/inferior to others was

perceived to be less “futsu”. The evaluations of personality traits such as positiveness and stability, and interpersonal attraction were influenced by the level of performance. In study 2, dealing with qualitative differences, respondents evaluated the normative person to be more “futsu” than the deviant, and the deviant was rated more positive than the normative. The effects on the interpersonal evaluation, however, were not mediated by the “futsu” cognition in both studies. The results implied that “futsu” cognition would not become salient, with perception on others.

## 1 問題

### 1.1 比較文化における日本人論

これまで、日本文化論や比較文化的な文献によって、欧米文化とは異なる「日本的な」特質が明らかにされてきた。その中でも、日本人の特徴として多くの文献で共通して指摘されてきたのは、対人関係における相互依存性であった。すなわち、日本人は他者との関係性や調和を重視するため、周囲の人々の様子や反応を常に気にし、個性的で独自の存在であることよりも他者と変わらず同じであることを志向する、という指摘がなされてきた（阿部, 2002；濱口, 1982；荒木, 1973；土居, 1971など）。このような見解は経験的には確からしいように思われるし、日本人の精神的健康や主観的幸福感が他者との関係によって規定されていることを示す知見もある（遠藤, 1995；Kitayama & Markus, 1994）。

このような日本人において、人や物の状態を記述することばとして重要なのが「ふつう」という概念である（大橋・山口, 2005）。「ふつう」とは、辞書的には「他と変わっていないさま」や「ごくあたりまえさま」を表すことばである（松村・山口・和田, 1986）。実際に、日本人は自己や他者を記述する際に「ふつう」ということばを頻繁に用いる。例えば日常会話においても、常識や自己の考えを主張するときに「ふつう（の人）は…だ」とか「ふつうはそんなことしない」などといったような発言をよく耳にする。一方、英語において「ふつう」に対応することばは、「通常の」という意味で *usual* や *ordinary*, *common* といったことばが充てられることが多いが、この他にも「一般の」という意味で

general, 「常態の」という意味で *normal*, 「平均の」という意味で *average*, 「大きさや成分などがふつう」という意味で *regular* などといったことばなどがある（小川, 1987）。このように、日本における「ふつう」は欧米の概念とは必ずしも一致するものではないと考えられる。

「ふつう」に関連する心理学概念としては、集団規範や逸脱、独自性-類似性などの概念が挙げられる。このような概念の研究文脈では、心理現象の文化的差異は個人主義-集団主義（Triandis, 1995, 1989）や相互独立的-相互協調的自己観（北山, 1998；Markus & Kitayama, 1991）などの概念によって説明されることが多い。しかし、前述のように、「ふつう」は欧米の概念と対応するものではないため、文化比較をおこなう前にまず日本人の心理現象に焦点を当ててそれ自体を検討する必要があると思われる。すなわち、固有心理学的な検討が必要であると思われる（大橋・山口, 2005）。

そこで、本研究では日本に固有な概念としての「ふつう」を扱い、日本人が他者と変わらず同じであることを志向するとされる「ふつう」志向性について検討する。

### 1.2 自己認知としての「ふつう」

日本人を対象としたいくつかの研究では、日本人には「ふつう」であることを求めるような動機があることが仮定されている（石井, 2005；Ohashi & Yamaguchi, 2004；元橋, 1993）。このような仮定は直感的には正しいように思われるし、文化論を背景として受け入れられてきた。しかし、実証的研究を概観してみると、日本人における実際の心理現象

は、必ずしもこのような傾向を示すものではないように思われる。

日本人を対象とした実証研究においても、自分が「ふつう」だと認知することが自己にとって好ましい状態であるという事実を示す研究は少ない。パーソナリティ特性などにおいて自分が「ふつう」であると認知していることが、ポジティブな心理状態と結びつくという研究結果は、極めて限定的にしか示されていない。例えば、大橋・針原（2000）においては、自己が「ふつう」であると認知していると自己好意が高いという結果が得られているが、これは「ふつう」に価値を置く回答者のみにあてはまる結果であり、その相関も弱いものであった。また、佐野・黒石（2005）においては、自己についての「ふつう」認知が高い回答者では孤独感が低いという結果が得られたが、これは独自性欲求が低い回答者に限られた結果であった。

一方で、「ふつう」であることがネガティブな状態であることを示すような研究結果もある。先に挙げた佐野・黒石（2005）では、一般に「ふつう」認知はウェル・ビーイングと負に相関していた。また、独自性研究としておこなわれたOkamoto（1983）では、「ふつう」認知は測定していないものの、パーソナリティ特性や意見・価値観・興味などが他者と極端に類似しているという実験フィードバックを与えた条件では、緊張や不安に関連する気分が高かった。

これに対して、課題遂行を扱う実験研究では、「ふつう」以上であるというフィードバックが満足感や感情状態を高めるという結果が得られている。高田（2000）では、認知課題において「優れている」あるいは「同等である」という実験フィードバックを与えた場合、「劣っている」という実験フィードバックを与えた場合と比較して、成績への満足度や自己評価が高く、実験前後で「愉快」の感情が上昇し、「沈鬱」・「焦燥」の感情が低下した。同様に、佐野（投稿中）では、認知課題において「優れている」あるいは「ふつう」という実験フィードバックを与えた場合、「劣っている」という実験フィードバックを与えた場合と比較して、状態自尊心や肯定的感情が高く、否定的感情が低かった。こ

れらの研究は、「ふつう」認知を直接扱っているわけではないものの、日本人にとって他者と変わらない状況が肯定的な心理状態をもたらすことを示す数少ない実証研究である。

また、佐野・黒石（2006）及び黒石・佐野（2006）では、場面想定法により「ふつう」認知の有効性を検討した。他者との差異が量的・質的に示される仮想場面を設定し、「ふつう」認知と感情状態について検討をおこなった。その結果、いずれの状況においても他者と同じ行動をとった場合に「ふつう」認知が高く、「ふつう」認知と連動する形で安静状態の感情が変化した。この研究結果は、他者と同じであるという状況が課題成績や遂行に対する肯定的・否定的な感情反応と融合しない形で、直接的な独自の影響をもつことを示した点で極めて重要である。ただし、感情に関する結果については、高田（2000）や佐野（投稿中）の結果と整合しない側面もあり、さらなる検討の余地があると思われる。

### 1.3 「ふつう」の状況依存性

以上のように、「ふつう」に関する研究結果は必ずしも一貫していない。しかし、先行研究を概観すると、ある共通点が指摘できる。質問紙研究に代表されるように、パーソナリティ特性や意見などの比較的安定した特性においては、「ふつう」はそれほどポジティブな状態でないように思われる（大橋・針原，2000；佐野・黒石，2005；Okamoto，1983）。一方で、実験研究で扱われている課題成績や遂行などのように、具体的な行動としての「ふつう」はポジティブな状態である可能性があるように思われる（高田，2000；佐野，投稿中）。

Mischel（1968）の状況論に言及するまでもなく、状況によって個人の行動や感情状態は異なるはずである。「ふつう」認知についても、「ふつう」であるかないかが顕現化するのは、ある特定の具体的な状況に置かれた場合であると考えられる。パーソナリティ特性や意見などを扱った質問紙研究では、状況要因を考慮しなかったために「ふつう」認知が影響をもたなかった可能性がある。実際に、特定の状況を想定させた質問紙研究では、「ふつう」であることが感情状態と関連していた（黒石・佐

野, 2006; 佐野・黒石, 2006). 「ふつう」認知について研究をおこなう場合には, 特定の状況を設定する必要があるように思われる.

さらに, 「ふつう」であるかないかの認知は, 基準となる集団(準拠集団)や周囲から特定の行動が期待される程度(社会的規範の強さ), 行動の自由度などによって変化するはずである. したがって, 本研究では状況の拘束力(外山, 2004)についても考慮することとした. ここでは, 社会的規範が強くとるべき行動が決まっているような拘束力の高い状況と, 緊張感が低く自由に行動することが許されているような拘束力の低い状況を設定し, 検討をおこなった. 設定した状況に関しては, 自己についての「ふつう」認知研究との比較を可能とするため, 佐野・黒石(2006)及び黒石・佐野(2006)と同一の状況とした.

#### 1.4 他者認知としての「ふつう」

元橋(1993)は, 日本人が「ふつう」を求める傾向について, 人並み志向と平準化志向という2つの文脈を指摘した. 人並み志向とは, 周囲から外れることを避け, 周囲と同様に振る舞うことを心掛ける傾向である. 一方, 平準化志向とは, 個人間に差がつくことを避け, 周囲から突出する者であれば攻撃するような傾向であるとされる. 言い換えれば, 前者は自分が「ふつう」でありたいと志向する傾向であり, 後者は他者を「ふつう」たらしめたいと志向する傾向であると考えられる. この指摘にみられるように, 「ふつう」は自己認知としてだけでなく, 他者認知においても重要となることが推測される. しかし, 他者の「ふつう」に関する研究は, 自己の「ふつう」に関する研究以上におこなわれていない.

このような状況の中で, 唯一の例外といえるのが大橋・山口(2005)である. この研究では, 「ふつう」の人について具体的な人物(同世代同性の人物)を想起させた上で, その特徴を尋ねることによって「ふつう」の他者がもたれている印象を明らかにした. 19対の性格特性語の評定からは, 「ふつう」の人は「ふつう」でない人と比較して, 知的能力や自己主張力は変わらないものの, 利他性が高く認知されていることが示された. また, 自由回答を

望ましさについてコードした結果からは, 「ふつう」の人が「ふつう」でない人よりも好意的に捉えられていることが明らかとなった. ただし, 大橋・山口(2005)は一般的な意味での「ふつう」の人を扱った研究であり, 自己の「ふつう」に関する研究結果から考えれば, このような「ふつう」の他者に対する認知は対人行動において積極的な意味をもたない可能性がある. また, 特定の状況における「ふつう」の人に対する認知は, これとは異なる可能性も十分に考えられる.

したがって, 他者の「ふつう」について考える場合には, 特定の状況を設定した上で検討することも必要であると考えられる.

### 1.5 本論文の目的

以上より, 本研究は場面想定法により「ふつう」の他者に対する認知を検討することを目的とした. その際, 拘束力を考慮した仮想場面を設定し, 特定の状況における「ふつう」認知の検討をおこなった.

## 2 研究1

### 2.1 目的

研究1では, 他者との差異が量的に示される状況において検討をおこなった. すなわち, 他者の遂行と比較して, 上回っているか, 同程度か, 下回っているかが数量的に示される場面を設定して検討をおこなった.

### 2.2 方法

#### 2.2.1 研究方法

場面想定法を用いた実験的質問紙調査による.

#### 2.2.2 回答者

大学生45名(男性10名;女性35名).

#### 2.2.3 質問紙

仮想場面を提示し, 各場面において登場する他者としての主人公を想定させた上で, そこでの「ふつう」認知および対人認知を求めた. 人物評定については, 対人認知の基本次元(林, 1987な

ど) やステレオタイプの認知次元 (Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002など) の研究を参考に, 4つの下位尺度を設けた。すなわち, 有能さ (「有能な」, 「たくましい」), あたたかさ (「やさしい」, 「誠実な」), 積極さ (「活動的な」, 「消極的な」), 自分勝手さ (「自分勝手な」, 「気むずかしい」) について回答を求めた。また, 行動評定としては, 好意 (「好ましいと思う」, 「よいと思う」, 「親しみを感じる」, 「尊敬する」) および非容認 (「問題ないと思う」, 「理解できない」, 「軽蔑する」, 「注意・アドバイスする」) を求めた。さらに, 「ふつう」認知を「周囲になじんでいる」, 「違和感を感じる」, 「周囲から浮いている」, 「ふつうだと感じる」の4項目により測定した。評定項目については, すべて「全くあてはまらない (1)」, 「あまりあてはまらない (2)」, 「どちらとも言えない (3)」, 「ややあてはまる (4)」, 「ぴったりあてはまる (5)」の5段階評定により回答を求めた。

## 2.2.4 場面設定

心理学的状況の拘束力 (外山, 2004) という観点を考慮して2つの仮想場面を設定し, 周囲の他者との比較により地位を操作した。拘束力が高い状況は, 販売員が食器を売る場面を設定した。同じ売り場の販売員の実績10~15セットに対して, 主人公の販売実績は上条件21セット, 中条件12セット, 下条件4セットとした。拘束力が低い場面は, 仲のよい友人とボーリングをする場面を設定した。友人のスコア100~120に対して, 主人公のスコアは上条件133, 中条件108, 下条件87とした。

## 2.2.5 要因計画

本研究では, 拘束力の高低は被験者内要因, 地位の上下は被験者間要因として操作した。各回答者には, 拘束力の高い場面と低い場面の両方について, 他者と比較して高い成績を示すか同程度か低い成績を示すか, いずれかのストーリーを提示した (ストーリーの配置については場面ごとにランダム)。ただし, 分析に際しては拘束力の高低についても便宜的に被験者間要因とみなし, 拘束力2

(高・低)×地位3 (上・中・下) の2要因分散分析をおこなった。

## 2.3 結果

### 2.3.1 操作チェック

場面の現実性については, 「この場面を具体的に思い浮かべられた」という質問に対して, 拘束力の高い場面の平均値は3.67 (標準偏差0.88), 拘束力の低い場面の平均値は4.04 (標準偏差0.95)であった。中央値3 (「どちらともいえない」と比較した結果, 2つの場面とも有意に高く評定されていた ( $t_{(44)}=5.09, p<.001$ ;  $t_{(44)}=7.36, p<.001$ )。また, 場面の拘束力については, 拘束力の高い場面の平均値は3.53 (標準偏差1.01), 拘束力の低い場面の平均値は2.09 (標準偏差0.87)であり, 場面間の差は有意であった ( $t_{(88)}=7.24, p<.001$ )。

### 2.3.2 「ふつう」認知

分散分析の結果, 拘束力×地位の交互作用が有意であった ( $F_{(2,84)}=13.31, p<.001$ )。拘束力の高い場面において地位の単純主効果が認められた ( $F_{(2,84)}=25.22, p<.001$ )。多重比較の結果, すべての条件間に有意差があり, 中条件>高条件>下条件の順に「ふつう」認知が高かった。また, 地位の高条件および低条件において拘束力の単純主効果が認められ ( $F_{(1,84)}=4.92, p<.05$ ;  $F_{(1,84)}=30.38, p<.001$ )。拘束力の高い場面では拘束力が低い場面よりも「ふつう」認知が低かった。

拘束力の主効果が有意であり ( $F_{(1,84)}=11.82, p<.01$ )。拘束力の高い場面では拘束力が低い場面よりも「ふつう」認知が低かった。また, 地位の主効果も認められ ( $F_{(2,84)}=12.11, p<.05$ )。中条件は高条件および下条件よりも有意に高く, 高条件と下条件の間に有意差はみられなかった (図1-1参照)。

### 2.3.3 人物評定

**有能さ** 拘束力×地位の交互作用が有意であった ( $F_{(2,84)}=5.36, p<.01$ )。拘束力の高い場面および拘束力の低い場面において地位の単純主効果が認められた ( $F_{(2,84)}=37.27, p<.001$ ;  $F_{(2,84)}=8.06, p<.01$ )。拘束力の低い場面における地位の中条件と低条件

以外のすべての比較対に有意差がみられた。また、地位の高条件および低条件において拘束力の単純主効果が認められた ( $F_{(1,84)}=6.15, p<.05; F_{(1,84)}=4.27, p<.05$ )。

拘束力の主効果は認められなかった ( $F_{(1,84)}=0.01, ns$ )。また、地位の主効果が有意であり ( $F_{(2,84)}=39.97, p<.001$ )、高条件では中条件および下条件

よりも有意に高く、中条件と下条件の間に有意差はみられなかった (図1-2参照)。

あたたかさ 拘束力×地位の交互作用は有意でなかった ( $F_{(2,84)}=3.06, ns$ )。拘束力の主効果は有意であり ( $F_{(1,84)}=7.99, p<.01$ )、拘束力の高い場面では拘束力が低い場面よりもあたたかさ評定が高かった。また、地位の主効果は認められなかった ( $F$

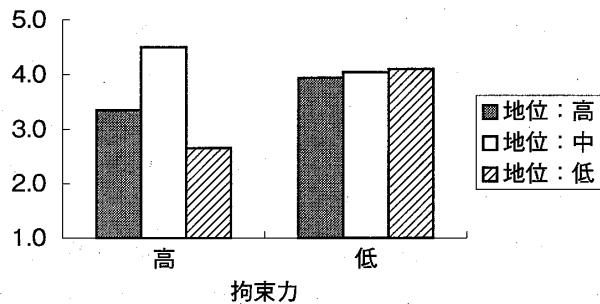


図1-1. 各条件の「ふつう」認知

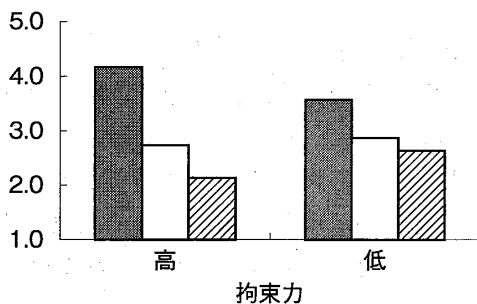


図1-2. 各条件の有能さ評定

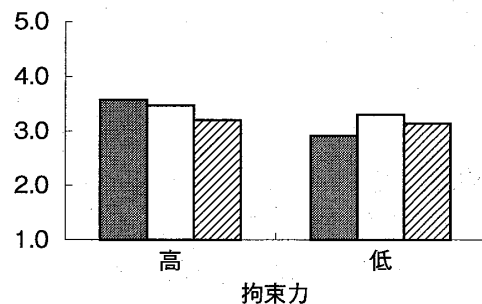


図1-3. 各条件のあたたかさ評定

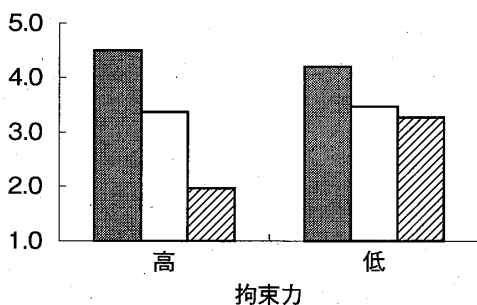


図1-4. 各条件の積極さ評定

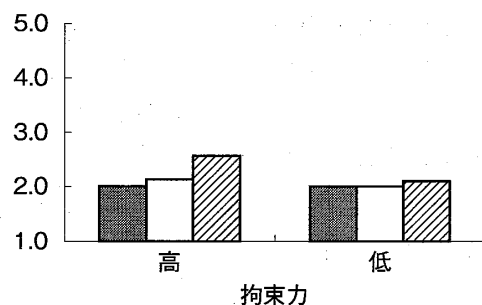


図1-5. 各条件の自分勝手さ評定

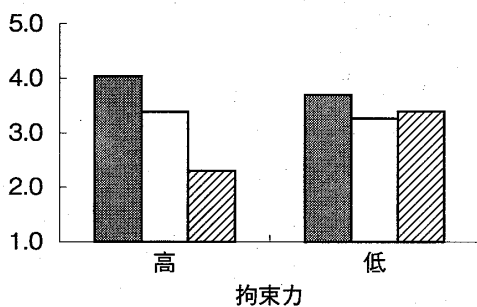


図1-6. 各条件の好意評定

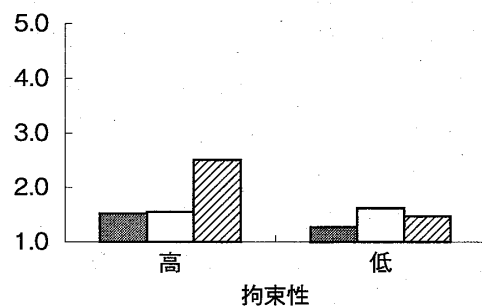


図1-7. 各条件の非容認評定

( $F_{(2,84)}=0.01$ , ns) (図1-3参照).

**積極さ** 拘束力×地位の交互作用が有意であった ( $F_{(2,84)}=9.59$ ,  $p<.001$ ). 拘束力の高い場面および拘束力の低い場面において地位の単純主効果が認められた ( $F_{(2,84)}=44.56$ ,  $p<.001$ ;  $F_{(2,84)}=6.68$ ,  $p<.01$ ). 拘束力の低い場面における地位の中条件と低条件以外のすべての比較対に有意差がみられた. また, 低条件においてのみ拘束力の単純主効果が認められた ( $F_{(1,84)}=6.15$ ,  $p<.05$ ;  $F_{(1,84)}=4.27$ ,  $p<.05$ ).

拘束力の主効果は有意であり ( $F_{(1,84)}=5.58$ ,  $p<.05$ ), 拘束力の低い場面では拘束力が高い場面よりも積極さ評定が高かった. また, 地位の主効果が有意であった ( $F_{(2,84)}=41.65$ ,  $p<.001$ ). すべての条件間に有意差があり, 高条件>中条件>下条件の順に積極さ評定が高かった (図1-4参照).

**自分勝手さ** 拘束力×地位の交互作用, 拘束力の主効果, 地位の主効果は, すべて有意ではなかった. ( $F_{(2,84)}=0.71$ , ns;  $F_{(1,84)}=2.92$ , ns;  $F_{(2,84)}=0.24$ , ns) (図1-5参照).

### 2.3.4 行動評定

**好意** 拘束力×地位の交互作用が有意であった ( $F_{(2,84)}=9.95$ ,  $p<.001$ ). 拘束力の高い場面において地位の単純主効果が有意であり ( $F_{(2,84)}=25.56$ ,  $p<.001$ ), すべての条件間に有意差が認められた. また, 地位の低条件において拘束力の単純主効果が認められた ( $F_{(1,84)}=20.17$ ,  $p<.05$ ).

拘束力の主効果は認められなかった ( $F_{(1,84)}=2.35$ , ns). また, 地位の主効果は有意であった ( $F_{(2,84)}=17.25$ ,  $p<.001$ ), すべての条件間に有意差があり, 高条件>中条件>下条件の順に好意評定が高かった (図1-6参照).

**非容認** 拘束力×地位の交互作用が有意であった ( $F_{(2,84)}=8.47$ ,  $p<.001$ ). 拘束力の高い場面において地位の単純主効果が有意であり ( $F_{(2,84)}=16.47$ ,  $p<.001$ ), 高条件と下条件, 中条件と下条件に有意差が認められた. また, 地位の低条件において拘束力の単純主効果が認められた ( $F_{(1,84)}=28.20$ ,  $p<.001$ ).

拘束力の主効果は有意であり ( $F_{(1,84)}=13.03$ ,  $p<.01$ ), 拘束力の高い場面では拘束力が低い場面

よりも非容認評定が高かった. また, 地位の主効果が有意であり ( $F_{(2,84)}=9.63$ ,  $p<.001$ ), 下条件は中条件および高条件よりも有意に高く, 中条件と高条件の間に有意差はみられなかった (図1-7参照).

### 2.4 考察

操作チェックの結果, 場面は具体的に想起されており, 拘束力についても想定通りの形で認知されていた. したがって, 研究1における場面の操作は有効であったと判断して, 以下の分析おこなった.

「ふつう」認知については, 特に拘束力の高い場面において, 地位の中条件でもっとも高く, ついで高条件, 下条件の順に低くなった. すなわち, 拘束力の高い状況では, 他者の遂行と比較して, 同程度の場合に「ふつう」認知が高くなり, 上回っている場合にも下回っている場合にも「ふつう」認知は低くなる. ただし, 下回っている場合の方が「ふつう」認知が低くなる程度は大きいという結果であった. これは自己についての研究結果 (黒石・佐野, 2006; 佐野・黒石, 2006) と一貫するものである. 自己についても他者についても, 「ふつう」であるかどうかの判断の仕方は大きく変わらないように思われる.

しかし, 佐野・黒石 (2006) 及び黒石・佐野 (2006) と本研究のデータを比較すると, 「ふつう」であると感じる程度については差異がみられ ( $F_{(1,170)}=20.71$ ,  $p<.001$ ), 他者についての方が「ふつう」認知が高かった. 2つの研究では仮想場面に同一の状況を用いたにも関わらず, 「ふつう」認知の程度が異なったのは, 自己についての判断と他者についての判断では「ふつう」だと感じる基準が異なることを示唆するものかもしれない.

人物評定に関しては, 有能さや積極さにおいて, 地位に対応した評定がみられた. すなわち, 他者と比較して遂行がよいほど有能さや積極さが高く評定された. 行動評定においても, 好意評定が同様の評定結果となった. これらの結果は, 他者と比較した場合に遂行が高い他者は, 能力があり, 積極的で, 好意的に捉えられることを示している. 一方, 行動評定における非容認については, 拘束力が強い場合に周囲よりも下回る遂行を示す人物に対して

容認しないという態度が示された。

以上のように、地位の操作は人物評定および行動評定に一定の影響を及ぼしていた。しかし、「ふつう」認知と人物評定および行動評定の間には、対応するような関連は認められなかった。このような結果は、他者が「ふつう」であったとしてもなかったとしても、「ふつう」認知を媒介とした形では、対人認知や対人感情に影響を及ぼさない可能性を示唆するものである。以上の結果を踏まえて、研究2をおこなった。

## 3 研究2

### 3.1 目的

研究2では、他者との差異が質の違いとして示される状況を設定し、検討をおこなった。すなわち、他者と比較して、行動が同じであるか異なっているかが質的に示される場面を設定して検討をおこなった。

### 3.2 方法

#### 3.2.1 研究方法

場面想定法を用いた実験的質問紙調査による。

#### 3.2.2 回答者

大学生30名（男性15名；女性15名）。

#### 3.2.3 質問紙

仮想場面を提示し、各場面において登場する他者としての主人公を想定させた上で、そこでの「ふつう」認知および人物評定（有能さ・あたたかさ・積極さ・自分勝手さ）・行動評定（好意・非容認）を求めた。評定項目については、研究1と同一のものを使用した。

#### 3.2.4 場面設定

心理学的状況の拘束力（外山，2004）という観点を考慮して2つの仮想場面を設定し、周囲の他者との比較により地位を操作した。拘束力が高い状況は、就職面接の場面とした。他の受験者が紺色

のリクルートスーツを着ているのに対して、主人公が紺色のリクルートスーツを着ている条件（同条件）と、グレーのリクルートスーツを着ている条件（異条件）を設定した。拘束力が低い状況は、喫茶店で友人4人と待ち合わせをする場面とした。友人がコーヒーを飲んでいるのに対して、主人公がコーヒーを頼む条件（同条件）と紅茶を頼む条件（異条件）を設定した。

### 3.2.5 要因計画

本研究では、拘束力の高低は被験者内要因、地位の内外は被験者間要因として操作した。各回答者には、拘束力の高い場面と低い場面の両方について、他者と比較して同じ行動か異なる行動かのいずれかのストーリーを提示した（ストーリーの配置については場面ごとにランダム）。ただし、分析に際しては拘束力の高低についても便宜的に被験者間要因とみなし、拘束力2（高・低）×地位2（同・異）の2要因分散分析をおこなった。

## 3.3 結果

### 3.3.1 操作チェック

場面の現実性については、「この場面を具体的に思い浮かべられた」という質問に対して、拘束力の高い場面の平均値は4.03（標準偏差1.00）、拘束力の低い場面の平均値は4.13（標準偏差1.20）であった。中央値3（どちらともいえない）と比較した結果、2つの場面とも有意に高く評定されていた（ $t_{(29)}=5.66, p<.001$ ;  $t_{(29)}=5.19, p<.001$ ）。また、場面の拘束力については、拘束力の高い場面の平均値は2.67（標準偏差1.42）、拘束力の低い場面の平均値は1.37（標準偏差0.67）であり、場面間の差は有意であった（ $t_{(58)}=4.53, p<.001$ ）。

### 3.3.2 「ふつう」認知

分散分析の結果、拘束力×地位の交互作用が有意であった（ $F_{(1,84)}=13.83, p<.001$ ）。拘束力の高い場面において地位の単純主効果が認められた（ $F_{(1,84)}=30.72, p<.001$ ）。地位の内条件では外条件よりも「ふつう」認知が高かった。また、地位の異条



件において拘束力の単純主効果が認められ ( $F_{(1,84)}=17.52, p<.001$ ), 拘束力の高い場面では拘束力が低い場面よりも「ふつう」認知が低かった。

拘束力の主効果が有意であり ( $F_{(1,84)}=4.84, p<.05$ ), 拘束力の高い場面では拘束力が低い場面よりも「ふつう」認知が低かった。また、地位の主効果も認められ ( $F_{(2,84)}=16.97, p<.001$ ), 同条件は

異条件よりも有意に高かった (図2-1参照)。

### 3.3.3 人物評定

**有能さ** 拘束力×地位の交互作用は有意でなく ( $F_{(1,84)}=0.01, ns$ ), 拘束力の主効果も有意ではなかった ( $F_{(1,84)}=1.16, ns$ )。また、地位の主効果は有意であり ( $F_{(1,84)}=5.07, p<.05$ ), 異条件では同条件よりも有能

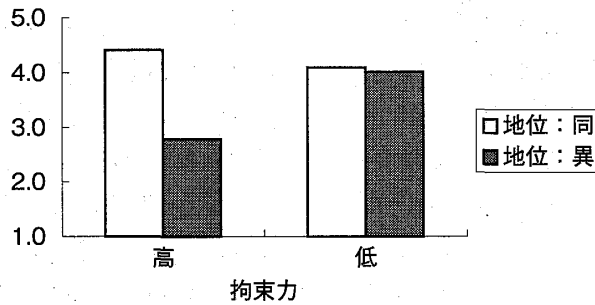


図2-1. 各条件の「ふつう」認知

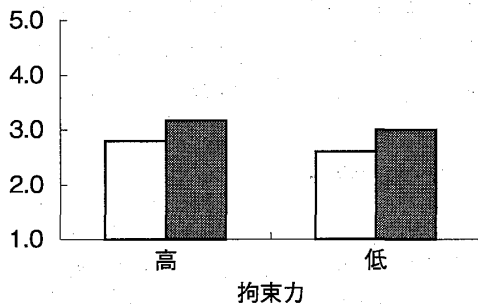


図2-2. 各条件の有能さ評定

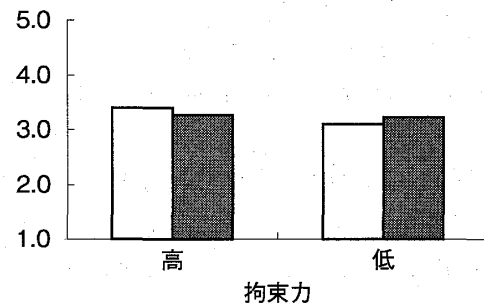


図2-3. 各条件のあたたかさ評定

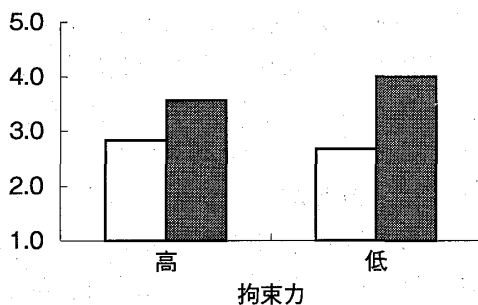


図2-4. 各条件の積極さ評定

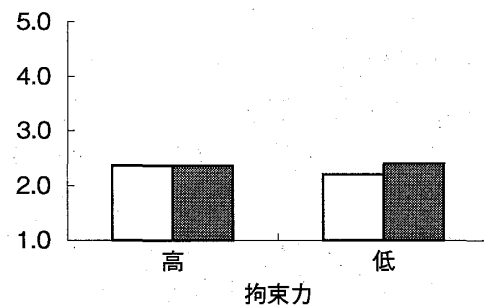


図2-5. 各条件の自分勝手さ評定

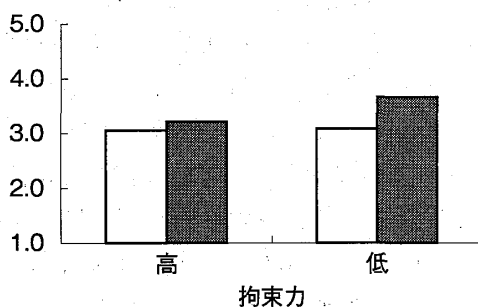


図2-6. 各条件の好意評定

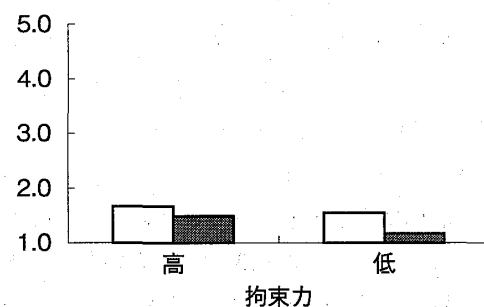


図2-7. 各条件の非容認評定

さ評定が有意に高かった(図2-2参照)。

**あたたかさ** 拘束力×地位の交互作用, 拘束力の主効果, 地位の主効果は, すべて有意ではなかった。 $(F_{(1,84)}=0.54, ns; F_{(1,84)}=0.85, ns; F_{(1,84)}=0.00, ns)$ (図2-3参照)。

**積極さ** 拘束力×地位の交互作用は有意でなく $(F_{(1,84)}=2.19, ns)$ , 拘束力の主効果も有意ではなかった $(F_{(1,84)}=0.43, ns)$ 。また, 地位の主効果は有意であり $(F_{(1,84)}=25.92, p<.001)$ , 異条件では同条件よりも積極さ評定が有意に高かった(図2-4参照)。

**自分勝手さ** 拘束力×地位の交互作用, 拘束力の主効果, 地位の主効果は, すべて有意ではなかった。 $(F_{(1,84)}=0.22, ns; F_{(1,84)}=0.10, ns; F_{(1,84)}=0.22, ns)$ (図2-5参照)。

### 3.3.4 行動評定

**好意** 拘束力×地位の交互作用, 拘束力の主効果, 地位の主効果は, すべて有意ではなかった $(F_{(1,84)}=1.33, ns; F_{(1,84)}=1.79, ns; F_{(1,84)}=4.02, ns)$ (図2-6参照)。

**非容認** 拘束力×地位の交互作用, 拘束力の主効果, 地位の主効果は, すべて有意ではなかった $(F_{(1,84)}=0.46, ns; F_{(1,84)}=2.18, ns; F_{(1,84)}=3.72, ns)$ (図2-7参照)。

## 3.4 考察

操作チェックの結果, 場面は具体的に想起されており, 拘束力についても想定通りの形で認知されていた。したがって, 研究2における場面の操作も有効であったと判断して, 以下の分析おこなった。

「ふつう」認知については, 特に拘束力の高い場面において, 地位の同条件で異条件よりも高くなった。すなわち, 拘束力の高い状況では, 他者と同じ行動をとると「ふつう」認知が高くなった。しかし, 佐野・黒石(2006)及び黒石・佐野(2006)とのデータの比較においては, 「ふつう」であると感ずる程度については差異がみられ $(F_{(1,170)}=10.67, p<.01)$ , 他者についての方が「ふつう」認知が高かった。これも研究1と同様の結果であり, やはり「ふつう」であるかどうかの判断の仕方は同じであっても, その基準は異なることを示唆するような結

果となった。このような差異は頑健であるように思われ, 自己に対しては「ふつう」であると感じる基準は厳しいのかもしれない。ただし, このような傾向は, Ohashi & Yamaguchi (2004)の指摘している自己の「ふつう」さを過大視する傾向とは整合しないように思われ, この点についてはさらなる検討が必要である。

人物評定については, 有能さや積極さにおいて, 地位に対応した評定がみられた。すなわち, 他者と異なる行動をとった場合に有能さや積極さが高く評定された。一方, 行動評定については, 地位との関連はみられなかった。

研究1と同様, 地位の操作は有能さや積極さの人物評定に関連していた。しかし, これらは「ふつう」認知と対応したのではなく, 周囲と異なる行動をとるということが直接的に対人認知に影響したものであると考えられる。研究2においても, 他者についての「ふつう」認知が対人認知や対人感情に影響を与えるという結果は得られなかった。

## 4 全体的考察

研究1においても研究2においても, 「ふつう」認知については, 自己の場合(黒石・佐野, 2006; 佐野・黒石, 2006)と同様の評定結果であった。ただし, 同一の状況であるにもかかわらず, 拘束力が高い状況では他者に対する評定値の方が高い傾向があり, 「ふつう」における自己認知と他者認知には差異があることが示唆された。

さらに, 他者が「ふつう」であるかどうかという認知は, 対人認知や対人感情に対して重要な影響を及ぼさなかった。このことから, 自己についての「ふつう」認知と他者についての「ふつう」認知は, その意味合いが大きく異なると考えられる。自己に関しては, 遂行の程度は肯定的感情および否定的感情に関連しており, 「ふつう」認知は安心感と関連していた(黒石・佐野, 2006; 佐野・黒石, 2006)。これに対して, 他者に関しては, 遂行の程度は有能さや積極さの判断などには一定の影響を与えるものの, 「ふつう」認知は対人認知や対人感情に直接的な効果をもつものではないことが示唆さ

れた。

研究1および研究2の結果は、「人並み志向」と対比される「平準化志向」(元橋, 1993)として指摘されるような現象が積極的にはみられない可能性を示唆するものであった。周囲から外れるような他者に対して否定的な態度がとられるという現象は、概念的には「スグレの引き下ろし」(京極, 1988)のような形でも生じるはずである。しかし、本研究では遂行が下回るような他者に対しての非容認という形で、きわめて限定的に示されるにとどまった。元橋(1993)においても「平準化志向」に関して明確な結果が得られていないことから、概念的な再検討も含めて、さらなる検討が必要であると思われる。

また、本研究では状況の拘束力に関わらず、周囲と異なる行動をとる他者は、有能で積極的であると捉えられていた。これは大橋・山口(2005)とは必ずしも整合しない結果であるように思われる。ただし、本研究の結果は「ふつう」認知を媒介しておらず、比較する上では明確になっていない点が多い。

いずれにせよ、「ふつう」認知については研究が少ないこともあり、一連の研究で得られた結果が頑健なものであるかを確認するためにも、さらに研究を継続していくことが望まれる。

## 5 参考文献

- 阿部謹也(2002) 世間学への招待 青弓社
- 荒木博之(1973) 日本人の行動様式—他律と集団の論理—講談社
- 土居健郎(1971)。「甘え」の構造 弘文堂
- 遠藤由美(1995) 精神的健康としての自己をめぐる議論 社会心理学研究, 11, 134-144.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- 濱口恵俊(1982) 間人主義の社会日本 東洋経済新報社
- 林文俊(1978) 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学紀要(教育心理学科), 25, 233-247.
- 石井徹(2005) 常識の規範的影響について 社会心理学研究, 20, 224-252.
- 北山忍(1998) 自己と感情—文化心理学による問いかけ— 共立出版
- Kitayama, S., & Markus, H.R. (1994). *Emotion and culture: Empirical studies of mutual influences*. Washington, D. C.: American Psychological Association.
- 黒石憲洋・佐野予理子(2006) 「ふつう」であることの安心感(2) 日本心理学会 第70回大会発表論文集 P.216
- 京極純一(1988). 日本人の秩序像~大きな政治と小さな政治(NHK市民大学テキスト) 日本放送出版会, 27-48.
- Markus, H. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 松村明・山口明穂・和田利政(編)(1986) 国語辞典 改訂新版 旺文社
- Mischel, W. (1968). *Personality and assessment*. New York: John Wiley & Sons.
- 元橋豊秀(1993) 人並み志向と平準化志向 社会心理学研究, 9, 1-12.
- 小川芳男(編)(1987) サンライズ和英辞典 旺文社
- 大橋恵・針原素子(2000) 自分を「ふつう」だと認知することは自己評価を高めるか? 日本社会心理学会 第41回大会発表論文集, 20-21.
- Ohashi, M., & Yamaguchi, S. (2004). Superordinary bias in Japanese self-predictions of future life events. *Asian Journal of Social Psychology*, 7, 169-185.
- 大橋恵・山口勸(2005) 「ふつうさ」の固有文化心理学: 人を形容する語としての「ふつう」の望ましさについて 実験社会心理学研究, 44, 71-81.
- Okamoto, K. (1983). Effects of excessive similarity feedback on subsequent mood, pursuit of difference, and preference for novelty or scarcity. *Japanese Psychological Research*, 25, 69-77.
- 佐野予理子(投稿中) 日本人における「ふつう」の意味: 自己改善動機の観点から 社会心理学研究, 未定.
- 佐野予理子・黒石憲洋(2005) 独自性欲求及び「ふつう」認知が精神的健康に及ぼす影響 国際基督教大学学報I-A教育研究, 47, 61-66.
- 佐野予理子・黒石憲洋(2006) 「ふつう」であることの安心感(1) 日本心理学会 第70回大会発表論文集 P.215
- 高田利武(2000) 日本人の「非自己高揚・自己批判傾向」再考—その規定条件と感情体験の実験的検討— 日本心理学会第64回大会発表論文集, 162.
- 外山みどり(2004) 心理学的状況の分類に関する探索的研究 学習院大学文学部研究年報, 51, 175-191.
- Triandis, H. C. (1989). The self and social behavior in differing cultural contexts. *Psychological Review*, 96, 506-517.

Triandis, H. C. (1995). *Individualism & collectivism*.  
Boulder: Westview Press.